

第1章 戦場

中国での戦い②

長洲島での海軍警備、そしてアメリカ船での帰還

熊野 功さんのお話から

○農会 農業技術の発展や農民の生活上などを目的に設立された、戦前の全国的農業団体。

○徴兵検査 兵隊にふさわしい性質や才能などを判定するために身体や身の上を検査すること。

○召集令状 人を軍隊に呼び集める命令書。赤色の紙を用いたので「赤紙」という。

○横須賀 戦前は、日本海軍の重要な軍港都市。

○広東省 表紙裏地図

○珠江 華南を貫流する

大河。下流に広大な三角洲を形成し、中心城市として広州市が発達している。表紙裏地図

○東シナ海 表紙裏地図

○香港 表紙裏地図

私は空知の沼田村（現在の沼田町）出身で、昭和十七年（一九四二年）に沼田村農会に勤務し農業指導の仕事に就いていました。

昭和十八年（一九四三年）六月に徴兵検査を受け、八月になって、召集令状が届きました。海軍として横須賀に行けということでした。当時は誰もがそうでしたが、私もいずれは国のために働くものだという思いでしたので、召集を当然のこととして受け入れることができしました。見送りは村をあげての盛大なものでした。物のないあの時代に立派なのぼりまで作ってくれたのを今でも覚えています。

横須賀にいたのは約半月で、すぐに広東省にある広東海軍警備隊として任務に当たるために、その基地がある長洲島へ向かいました。珠江という川の途中にある小さな島です。警備艇も合わせて十隻ほどの船団を組んで横須賀を出港しました。後で聞いた話では、東シナ海に入って機雷でやられた船もあったようですが、私たちは何とか無事にそこを通過し、香港を経由して長洲島に着きました。

長洲島では一か月間、新兵教育を受けましたが、当時の軍隊というところがいかにかにひどいところか、この時に嫌というほど思い知らされました。とにかく上官の言うことが絶対で、誰もが正しいと思うことが、まったく通じないのです。そして、ささいなことでも、すぐさま総員集合をかけて、全員が集まった中でびんたを張られたり、こん棒でおしりをぶん殴られたりしました。理屈なんてありません。それが軍隊でした。

○機雷 水中に設置し、艦船が触れると爆発するしかけの武器。

○びんた 他人のほおを手のひらで打つこと。

○こん棒 手に持って振り回せるくらいの長さの棒。

○マラリア 熱帯地方の伝染病。

○匪賊 一般には、集団で出没し殺人や強奪を犯す盗賊のこと。日中戦争中、抗日ゲリラの称に日本軍が用いた。

○B25 ノースアメリカン社が製造した中型爆撃機。アメリカによる初の日本本土空襲（一九四二年四月十八日）を行ったのがこの爆撃機である。

○機銃掃射 機関銃などを敵をなぎ倒すように射撃すること。

長洲島では、日中の気温が四十度にもなるので、午後は昼寝をして、四時頃から訓練が続くのです。一か月も経つと、マラリアにかかるなどして、体がおかしくなったりします。

当時、この辺りでは匪賊が出没して荷物を運んでいる船を襲うことが頻繁にあり、私たちが広東海軍警備隊が警備にあたっていました。

ある時、長洲島からそれほど離れていないところで、仲間の船が襲われて、一人が殺されて帰ってきました。そのとき、私は初めて殺されて死んだ人間の体に触れました。抱き起こしたときの感触が冷たかったこと、そして、倒れたときの格好のまま固まっていたことは今でも忘れられません。殺りくの生々しさに身が震えました。

戦争が厳しさを増したのは昭和十九年（一九四四年）の夏を過ぎたあたりからでした。B25が、中国に築いた米軍基地から私たちが警備隊を攻撃してきたのです。珠江の対岸から低空で飛んで来て機銃掃射をするのです。B25は何度も旋回して、機銃掃射を繰り返します。私は必死に身を隠し、脅えながら空襲が止むのを、ただただ待つばかりでした。



イメージ図

B25

長洲島での海軍警備、そしてアメリカ船での帰還

○外地 日本固有の領土以外の領有地。朝鮮や台湾、樺太、関東州（満州の別称）、南洋群島など。樺太は昭和十八年（一九四三年）に内地に編入された。

○捕虜 戦争などで敵に捕らえられた人。
○収容所 人や物品を入れる場所。特に捕虜などを収容する施設。

昭和二十年（一九四五年）、終戦を迎えました。天皇陛下のお言葉があると伝えられ、全員集合してラジオを聞いていました。ですが、外地にいたこともあり、聞こえてくるのはガーガーという音ばかり。ところどころしか聞き取れず、それも雑音混じりでしたが、何となく戦争が終わったというのを感じ取ることができました。上官も同じだったようで、みんな一緒になってホッとしましたのを覚えています。

終戦後、私たちは捕虜となり収容所に移動させられ、しばらくの間長洲島での生活を余儀なくされました。

昭和二十一年（一九四六年）になり、ようやく日本に帰してもらえることになりました。まず、私たちは長洲島から珠江を下り香港へ向かいました。香港には、中国大陸の北からも陸軍の兵隊がどんどん移送されてきました。移送されてきた陸軍の船には飲み水をまともに積んでおらず、のどが渴くと珠江の水を飲まざるを得ないような状況でした。しかし、当時の珠江の



イメージ図

水葬

○赤痢 大腸がおかされ、下痢・発熱・腹痛などをともなう伝染病。

○LST アメリカ海軍の揚陸艦。戦車や歩兵物資を載せて運び、海岸に接岸して陸に揚げる。

○水葬 航海中に死んだ人の遺体を水中に沈めてほつむること。

水は大変に不衛生で、飲むと伝染病にかかるのです。当時、赤痢などの病気は当たり前で、それで何人も亡くなったそうです。

帰還船は米国のLSTです。陸・海軍の軍人二百余名位が便乗したと思います。そんな中、やっと二月ごろに、LSTに乗せられて香港を出港しました。昭和二十年の敗戦まで戦ってきた敵国の船で帰国する不思議さを感じ、みんなでそう話し合ったものです。

三月の中ごろ、東シナ海に出ました。私たち海軍は、そこで亡くなった人みんなを棺桶に入れて軍隊旗で包み、甲板から海に流しました。そして兵隊全員で帽子を振ってお別れをするのです。香港を出てから東京湾に入る前までに十二人とお別れをしました。

東京湾に入っても、また一人亡くなりましたが、もう水葬はできません。かと言って亡くなった人を積んですぐに岸壁につけるわけにもいかず、沖で約二十日間に渡って、伝染病を持っていないかどうか毎日検査されました。そうしてやっと上陸が許され、北海道へ向かうことができたのです。家に帰ったのは二十一年の四月末だと思えます。母親が涙を流して喜んでくれました。

北海道に向かう途中で、上野を見ました。一面焼け野原でした。戦前見ていた東京かと、信じられないくらいひどい光景でした。兵隊に出た人も残った人も、みんなそれぞれの立場で、言い表せないような苦労や悲惨なことがあったのです。戦争というのは罪悪なんです。絶対戦争はすべきではないと思えます。そのことを私は強く言いたいと思います。

DATA

平成21年度清田区平和事業

聴き取り

- ・平成21年9月29日
- ・清田区役所



熊野 功(くまの・いさお)さん

- ・大正11年(1922年)生まれ
- ・札幌市清田区在住